

せいげつ

かた つ

# 井月さんを語り継ごう

## ①お墓

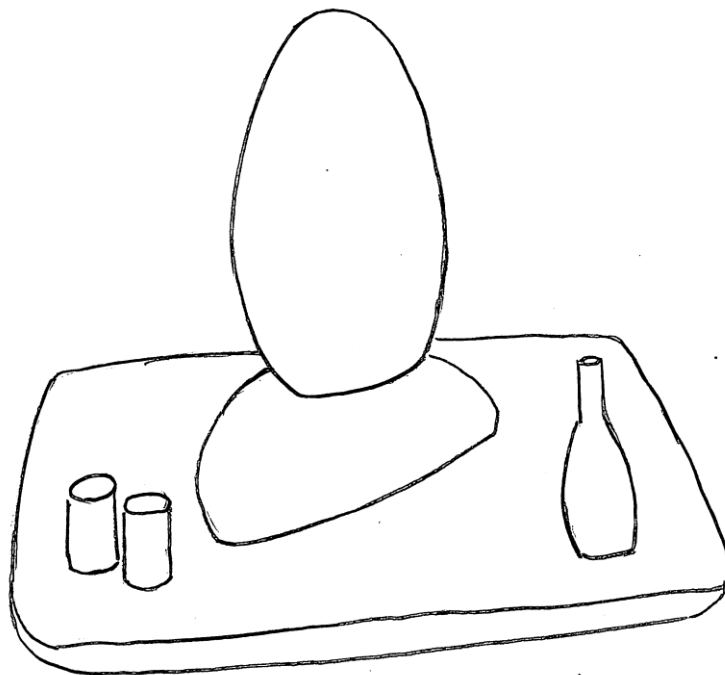
いなしみすず すえひろ せいげつ はか  
伊那市美簗の末広に、井月さんのお墓が

あります。ずんべらぼうの、はげ頭あたまのような

かたち はか だれ さけ も  
形のお墓には、いつも誰かがお酒を持ってき

そな  
て、お供えしてあります。

ひと  
いったい、どんな人だったのでしょうか。

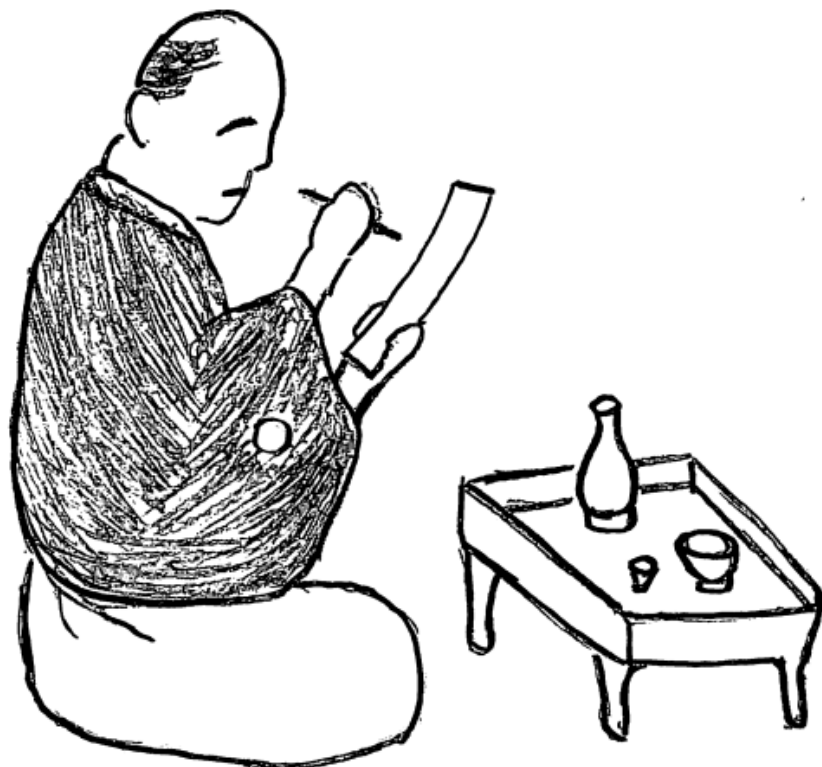


せんりょうせんりょう  
②千両千両

せいげつ                      じぶん   いえ   も                      ひと   いえ  
井月さんは、自分の家を持たず、人の家を  
と   ある                      く  
泊まり歩いて暮らしていました。

   さけ                      しょくじ    せんりょうせん  
そして、お酒や食事をいただく「千両千  
りょう                      い                      よろこ                      れい                      はいく                      か  
両」と言って喜び、お礼に俳句を書きました。

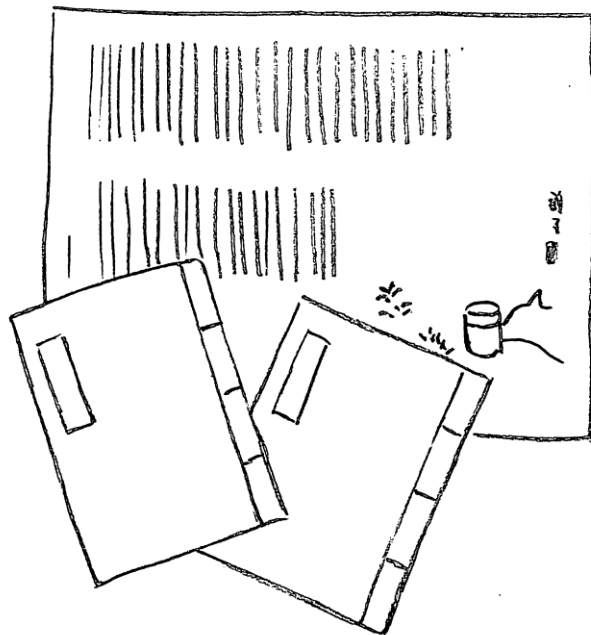
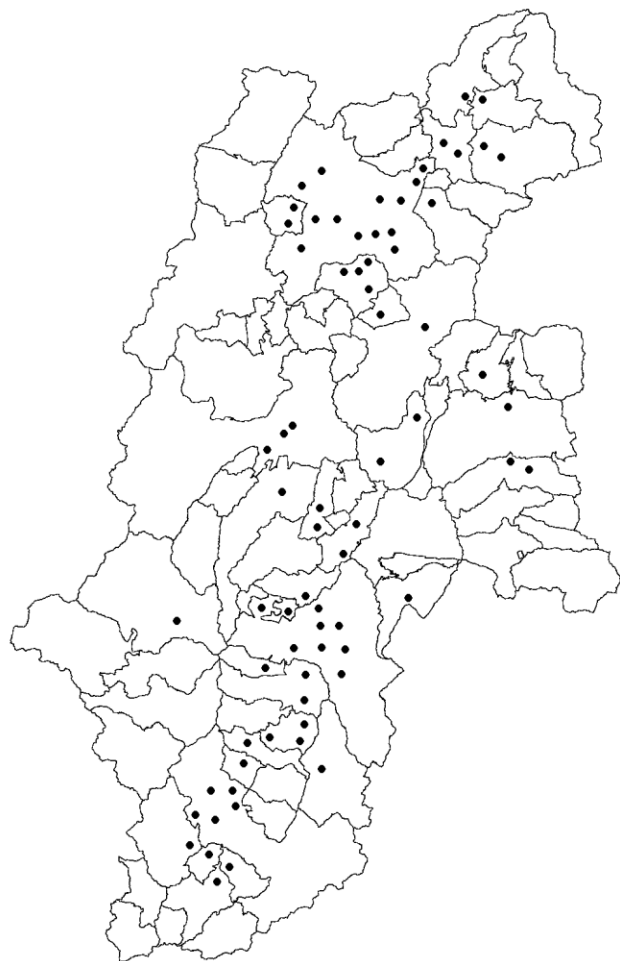
せいげつ                      じ                      たいへんじょう                      ず    むらびと  
井月さんの字は、大変上手だったので、村人  
   よろこ  
たちに喜ばれたのです。



はいく あつ ほん  
③俳句を集めて本を

たびぐ せいげつ  
そうやって旅暮らしをしながら、井月さんは  
なかま つく なかま はいく  
仲間をたくさん作りました。仲間たちから俳句  
あつ ほん しゅっぱん  
を集め、本を出版しようとしていたのです。

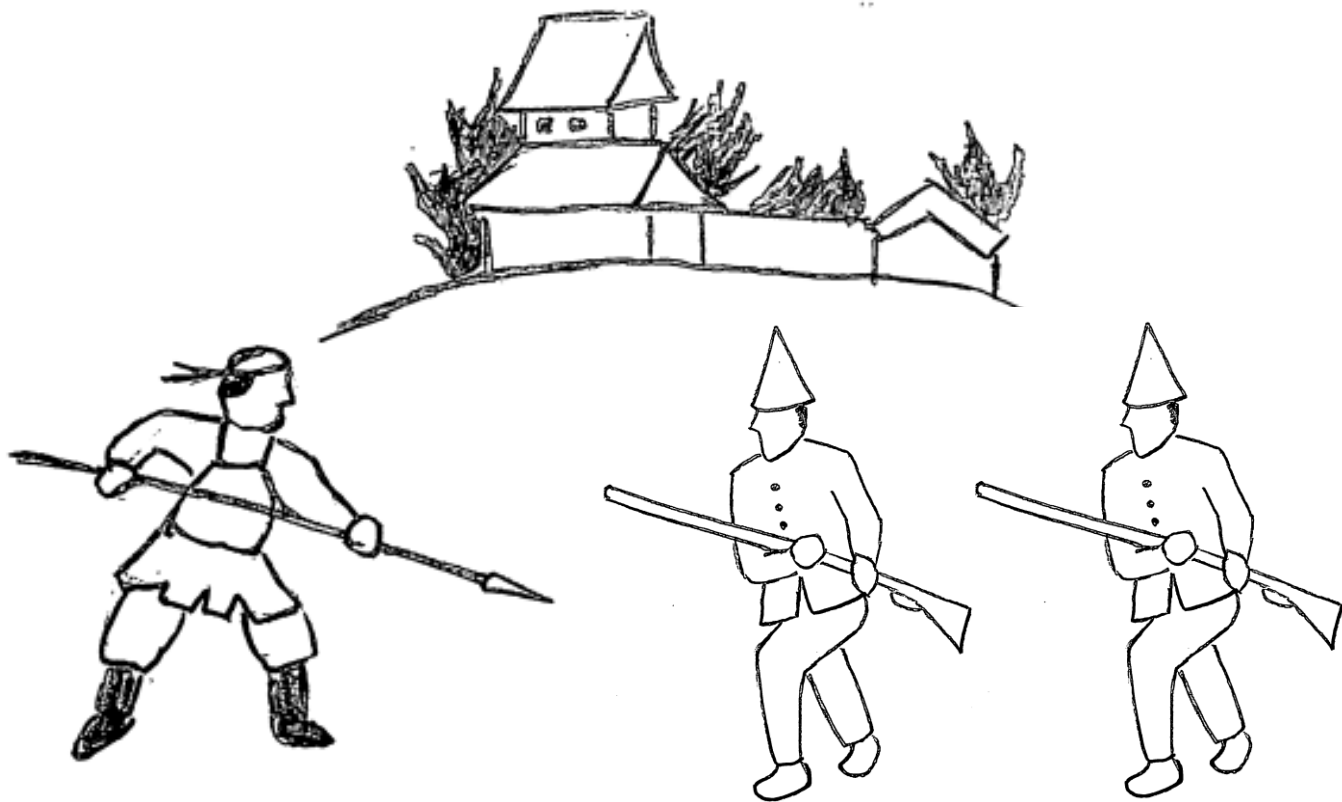
せいげつ しんしゅうぜん ど ある まわ さい  
井月さんは、信州全土を歩き回り、41歳の  
いいだ さい たかとお さい  
ときに飯田で、42歳のときに高遠で、43歳の  
ながの しゅっぱん  
ときには長野で出版しました。



ぼ しんせんそう  
④ 戊辰戦争

できあ ほん て せいげつ  
出来上がった本を手みやげにして、井月さ  
んはふるさとの越後に帰り、お母さんの墓参り  
をしました。

ぼ しんせんそう お えちご  
しかしそのあと、戊辰戦争が起こって、越後  
の町は、新政府の軍隊に焼かれてしまったの  
です。井月さんは、また信州へ戻って行きまし  
た。



はいく どうじょう つく  
⑤ 俳句の道場を作りたい

せいげつ はいく どうじょう つく おも た  
井月さんは、俳句の道場を作ろうと思い立  
ちました。なかま かこ しんしゅう く  
仲間なにか囲まれながら、信州しんしゅうで暮ら  
たいねがと願ったのでしょう。道場どうじょうを建てるのよに良  
い場所ばしょを、伊那谷いなだにの春近村はるちかむらに見つけました。

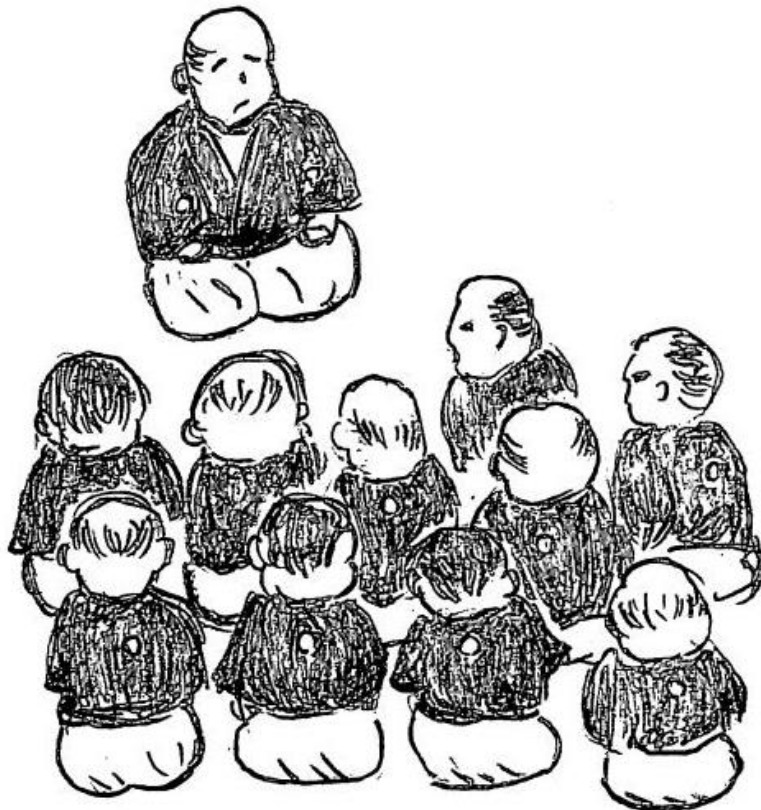
しんせい ふ こせき  
ところがそのころ、新政府が「戸籍」という  
ほうりつ つく せいげつ こせき  
法律ほうりつを作ったのです。井月さんせいげつには戸籍こせきがな  
く、道場どうじょうを建てるたことができなくなりました。



かえ  
⑥なぜ帰らない

むらびと せいげつ えちご かえ こ  
村人たちは、井月さんに、越後へ帰って戸  
せき すす せいげつ  
籍をもらってくるように勧めました。そして井月  
そうべつかい せいだい ひら  
さんのために、送別会を盛大に開きました。

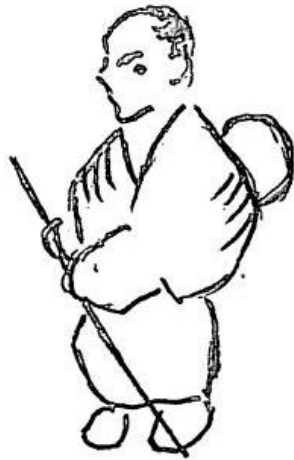
せいげつ えちご  
ところが、いつまでたっても井月さんは越後  
かえ  
へ帰りません。いったい、どうしたというのでし  
ぼしんせんそう や えちご かえ  
よう。戊辰戦争で焼かれた越後には、もう帰  
ばしよ  
る場所がなかったのでしょうか。



## ⑦置き去り

ごう に むらびと せいげつ ぜんこう  
業を煮やした村人たちは、井月さんを善光  
じ つ だ せいげつ  
寺まで連れ出しました。そして、井月さんがわ  
らじのひもをぐずぐず結んでいるうちに、置き  
ざ かえ  
去りにして帰ってしまいました。

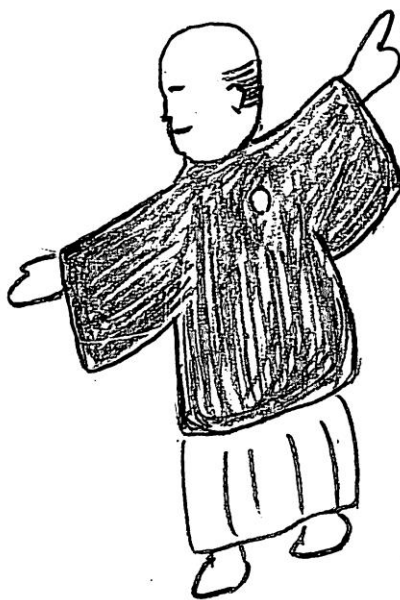
ぜんこう じ く えち ご  
善光寺まで来れば、ふるさとの越後まであ  
はんぶん みち せいげつ かえ  
と半分の道のりです。きっと井月さんは帰るだ  
らうと、むらびと おも  
ろうと、村人たちは思ったのでしょうか。



ゆ ば  
⑧ 行き場がない

せいげつ えちご かえ なかま  
井月さんは越後に帰らず、仲間がたくさん  
なかじょうむら い  
いる中条村へ行きました。そこにちょうどいい  
どう み こんど はいく どうじょう  
お堂を見つけて、今度こそ俳句の道場にしよ  
おも  
うと思ったのです。

なかじょうむら こせき ことわ  
しかし中条村でも、戸籍がないので断られ  
てしまいました。ゆ ば せいげつ  
行き場のない井月さんは、ま  
いなだに もど い  
た伊那谷へ戻って行きました。



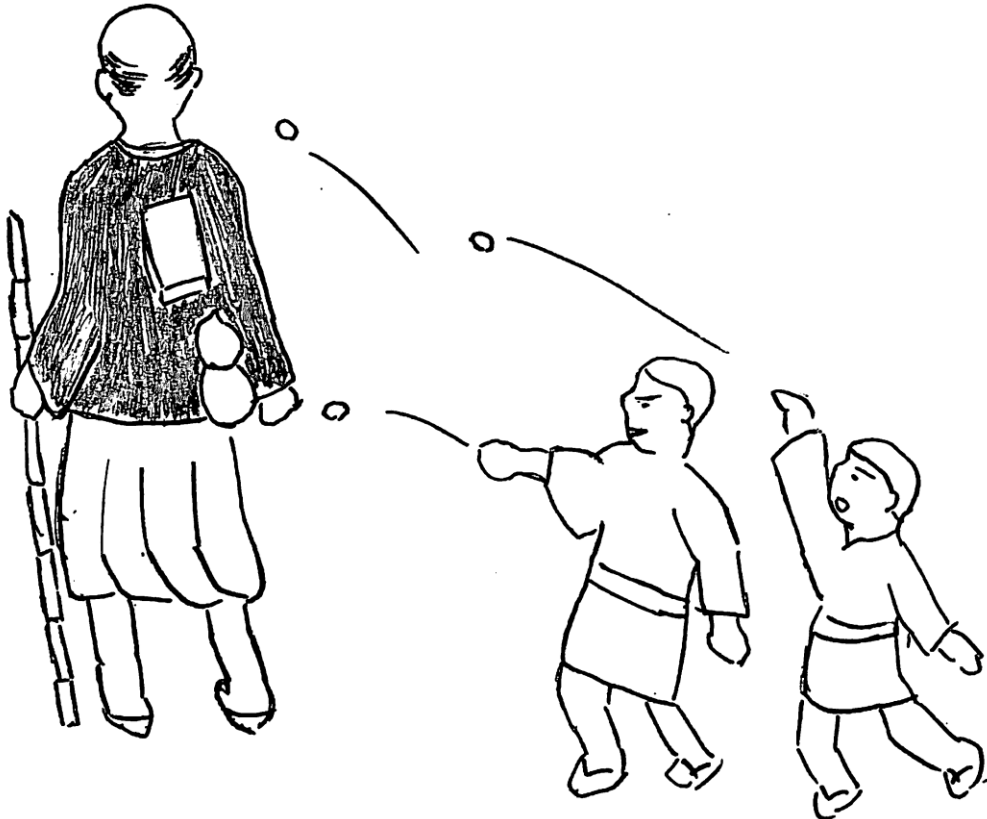


きら もの  
⑨ 嫌われ者に

どうじょう つく ゆめ うしな せいげつ さけ  
道場を作る夢を失った井月さんは、お酒に

おぼれるようになりました。着物はボロになり、  
むらびと きら こし  
村人たちに嫌われました。腰にひょうたんをぶ  
らさげて、つえをつきながらトボトボと道を歩く  
と、村の子どもたちが石を投げつけました。

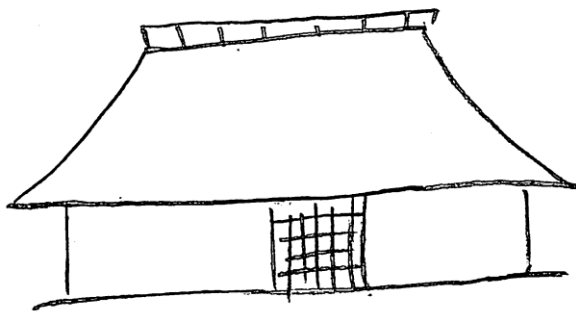
それでもなお、ほん つく いえいえ まわ  
て俳句を集める暮らしを続けました。



⑩ ようやく<sup>こ せき</sup>戸籍が

はいく あつ ほん げんこう で き あ  
俳句は集まり、本の原稿は出来上がりまし  
の せいげつ かね  
たが、飲んだくれの井月さんにはお金がなくて、  
しゅっぱん  
出版することができませんでした。

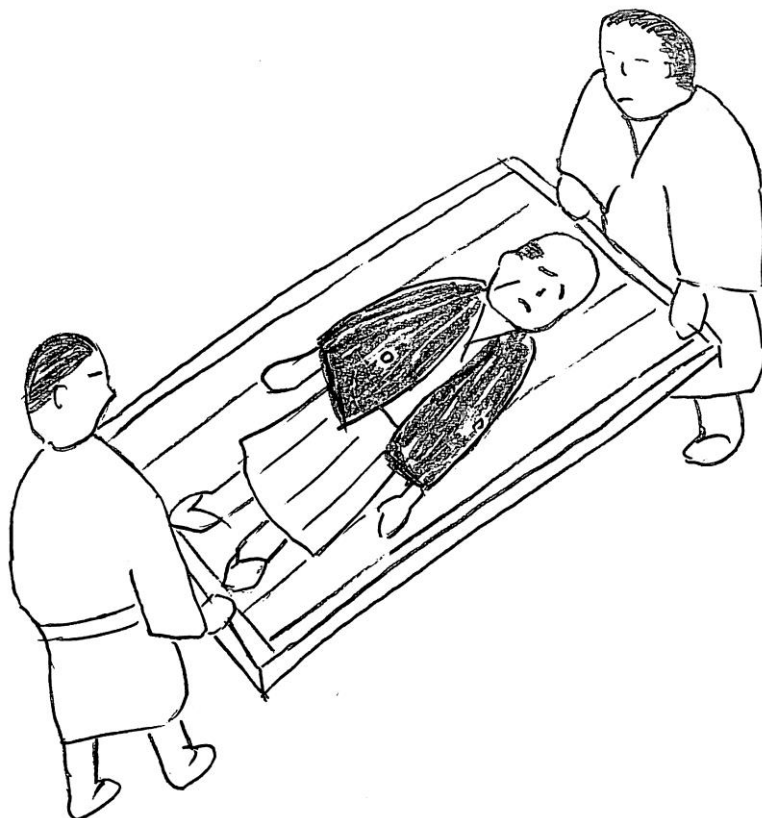
せいげつ く み すずむら  
そんな井月さんの暮らしぶりを、美簗村の  
なかま み こ せき つく  
仲間たちが見かねて、戸籍を作ってあげまし  
せいげつ かね だ あ  
た。また、井月さんのためにお金を出し合って、  
ほん つく さい  
本を作ってあげました。64歳のときでした。



ゆ だお  
⑪ 行き倒れ

しかし、それでも井月さんは、旅暮らしをや  
めませんでした。自分の生き方を変えることが  
できなかつたのでしょう。そしてとうとう、明治  
19年の冬、東伊那村の田んぼの中で、行き  
倒れになっているのを発見されました。

むらびと せいげつ といた の ひやま  
村人たちは、井月さんを戸板に乗せて火山  
とうげ こ とみがたむら はこ  
峠を越え、となりの富県村まで運びました。



## ⑫どこやらに

それから井月さんは、美簗村の家へ移され、  
しばらく看病してもらいましたが、明治20年  
三月十日、66歳で亡くなりました。

自分の生き方を最後までつらぬき通し、安  
らかな気持ちで息を引き取ったのでしょう。亡  
くなる直前に「何処やらに鶴の声きく霞かな」  
という俳句を書き残したと伝えられています。

